

1983年群馬県におけるセジロウンカの発生について

高山隆夫・岩田直記・田村利行
(群馬県農業総合試験場)

1983年の夏から秋にかけて、群馬県の平坦部ではセジロウンカがイネで増殖し、一部の品種では吸汁害による穂の褐変、不稔、枯死の症状が現われた。本県ではセジロウンカによる実害は初めての経験であるため、発生経過と原因を検討し、その概要を報告する。なお、伊勢崎農業改良普及所の川島保二技師には同管内のセジロウンカのすくい取りをお願いした。ここに記して謝意を表する。

試験方法

圃場の発生調査：方法 捕虫網による20回振りすくい取り調査又は同換算，場所 発生推移並びに防除試験 前橋市東大室町，品種間差 前橋市亀里町 伊勢崎市中町 佐波郡玉村町上之手，耕種概要 麦跡の普通栽培（6月下旬植），品種 第3表のとおり。

予察灯調査：前橋市江木町 農総試験場内 白色電球60W。平年は1967年から16年間の平均。

防除試験：品種 ニホンマサリ，6月27日植付 中苗機械植，1区2a 2連制，薬剤処理 植付直前エチルチオメトン粒剤 苗箱当たり100g 全区に施用，植付後は7月29日と8月8日にスミバッサ粉剤DL（MEP2.0% BPMC2.0%）を防除区に10a当たり4kg 散布した。調査月日は第2表のとおり。

結果及び考察

県内における初発生は吾妻郡中之條町町五反田の予察灯で7月2日に確認され、圃場におけるすくい取り調査では吾妻郡吾妻町の試験圃場で7月9日に初めて認められ、いずれも平年より早い発生であった。その後、7月末までの発生は成虫の長距離移動によるものと考えられ、圃場における密度は低かった。しかし、予察灯の誘殺数は平年より多く、7月中には上旬、中旬、5半旬、6半旬と4回の飛来があり、その中では7月21日から23日と同26日から月末までの飛来が多かった。この頃になると地区予察圃の予察灯やすくい取り定点でも、次々に成虫が確認され、本年の発生量は多くなることが予想された。8月13日の予報第5号

では本虫の多発生を予報したが、この時点では、新しく導入された特定の品種に関する情報や経験が乏しく、残念ながら被害を予測することは困難であった。

7月に飛来した成虫は順次産卵を始め、前橋市で幼虫を認めたのは8月初めであった。侵入後の1世代幼虫は8月8日から同11日頃最盛期に達したが、その後減少し8月18日から同23日頃最低となった。この頃になるとイネで1世代を経過した2回目の成虫が増加を始め、そのピークは8月末から9月初めに現れた。この傾向は予察灯でも同様で、成虫の誘殺数は8月第3半旬の飛来を谷間とした後、増加に転じ、8月第6半旬には最盛期に達した。本虫を25℃で飼育すると卵期

第1表 予察灯への飛来状況と気温（前橋市）

月	半旬	本年	平年	± S D	気温	平年差
7	1	0	0.2	0.9	21.4	-2.3
	2	0	0	0	29.1	-3.9
	3	2	0.4	0.8	20.6	-3.0
	4	0	0.7	1.0	23.4	-1.2
	5	20	0.9	1.7	24.5	-0.8
	6	27	1.3	1.3	27.4	+1.3
8	1	13	4.3	5.8	26.5	+0.3
	2	12	16.6	40.9	28.8	+2.8
	3	7	25.8	35.8	27.3	+1.2
	4	66	24.8	19.3	27.3	+1.4
	5	119	44.7	66.9	22.2	-3.2
	6	467	57.4	122.3	25.5	+0.8
9	1	101	44.8	88.1	26.3	+2.8
	2	33	27.3	23.6	23.3	+0.5
	3	108	20.5	21.1	22.4	+0.4
	4	41	69.1	135.7	19.9	-1.1
	5	86	57.8	104.9	19.8	0.0
	6	11	36.7	78.3	19.8	-2.0
10	1	124	—	—	19.9	+1.7
	2	4	—	—	17.3	+0.4

第2表 セジロウンカの発生推移と防除効果（前橋市東大室町）

調査月日	7.19	7.25	7.29	8.3	8.8	8.11	8.13	8.18	8.23	8.29	9.2	9.10	
無防除区	成虫	0.5	29.5	25.0	12.5	11.5	8.0	13.0	35.0	61.0	160.0	156.0	70.0
	幼虫	0	0	0	17.5	53.5	27.5	20.0	10.5	8.0	25.0	130.0	308.0
	計	0.5	29.5	25.0	30.0	65.0	35.5	33.0	45.5	69.0	185.0	286.0	378.0
	若令	0	0	0	17.0	31.5	9.0	5.0	4.0	0	2.0	60.0	118.0
	中令	0	0	0	0.5	17.5	10.5	6.0	4.5	0	8.0	32.0	84.0
	老令	0	0	0	0	4.5	8.0	9.0	2.0	8.0	15.0	38.0	106.0
防除区	成虫	1.0	44.0	28.0	3.5	34.0	6.5	7.5	36.0	53.0	97.0	107.0	50.0
	幼虫	0	0	0	3.0	83.5	0	0	1.0	1.0	9.0	56.0	124.0
	計	1.0	44.0	28.0	6.5	117.5	6.5	7.5	37.0	54.0	106.0	163.0	174.0
	若令	0	0	0	3.0	67.5	0	0	1.0	0	1.0	32.0	44.0
	中令	0	0	0	0	11.0	0	0	0	1.0	3.0	10.0	38.0
	老令	0	0	0	0	5.0	0	0	0	0	5.0	14.0	42.0

間は7日から8日、幼虫期間は14日から15日とされているが、つゆ明け後の7月第6半旬から8月第4半旬まで、平均気温は25℃を越えているので、この間、卵、幼虫期を経過したことが適合し、成虫の異常飛来があったほぼ1カ月後に次の成虫のピークを迎えたといえる。更に次世代幼虫は8月第6半旬より増加を始め、9月に入って急激に増殖した。

9月10日頃になると、飼料稲や縞葉枯病抵抗性品種のむさしこがね、もちではマンゲツモチなどで幼虫密度が高くなり、特に外国稲の飼料稲では田面が黄変し、出穂不能になるものも現れた。飼料稲でも日本稲の瑞豊では被害が少なく、縞葉枯病抵抗性品種では愛知37号C（青い空）の被害は少なかった。

2世代幼虫の幼虫比率は9月前半までは多かったが、後半になると逆転し、成虫の方が多くなり、その後は秋冷とともに減少していった。予察灯では10月第1半旬が3回成虫誘殺のピークになっているが、9月第3半旬に一山あることや、9月後半の不順天候の影響を考えると、最盛期はこれより幾分早い9月下旬と考えてよさそうである。本県に多い麦跡の普通栽培では出穂期が9月上旬になる場合が多く、7月下旬の飛来からスタートする2世代幼虫の発生最盛期と一致する。中部、西部の平坦部ではこの作型が多く防除回数も少ないので、飼料稲やむさしこがねを栽培すると恰好の増殖場所となり、被害が発生したといえる。

次に防除との関連であるが、供試品種がニホンマサリであるため、セジロウンカの密度はそれほど高くなかった。7月29日と8月8日の2回防除区は薬剤散布1カ月後の9月10日に無防除区100に対し、46と半数以下に抑えられていた。しかし本虫が好んで増殖す

第3表 セジロウンカすくい取り調査

調査場所	品種	成虫	幼虫
前橋市亀里町 (9.26)	B. ホンジュラス	3,100	1,770
	瑞豊	190	190
	日本晴	170	80
伊勢崎市中町 (9.12)	むさしこがね	480	3,840
	マンゲツモチ	400	3,440
	アキニシキ	100	860
伊勢崎市今井 (〃)	むさしこがね	320	16,960
	愛知37号C	120	600

る品種の場合は密度が急激に高くなるのが考えられるので、2回成虫の発生盛期に当たる8月下旬の防除は重要となろう。勿論、その年の発生量の多少が防除要否を決めるわけであるが、1世代幼虫密度に比べ、2回成虫密度は高いので、早期・早植栽培圃場等で増殖した成虫の飛来も考えられ、また、本虫は1カ所に定着して世代を繰り返すことは少ないとも言われているので、この時期の密度調査は今後重要な課題となろう。

以上の結果から、本虫の多発原因は7月下旬の異常飛来と遅い作型、つゆ明け後から9月上旬までの高温、本虫が好む品種の導入があげられる。今後、品種面では外国稲の飼料稲は減少したとしても、むさしこがねは増加するので、本虫の発生を助長させる要因が加わるわけであるから、的確な発生情報や適切な防除対策が要望され、発生予察組織の地道な防除活動が益々重要になってくると考える。